

第二編 先史・原史

## 第一章 旧石器時代

### 第一節 旧石器時代概説

#### 一 人類の誕生

##### 人類の発生と進化

地球が誕生してから現在に至るまで約四五億年の時間を経ている。三五億年前に生物は発生し、進化を遂げて多様な種が生み出されてきた。約六五〇〇万年前の中世代白亜紀の終わりとともに全盛を極めた爬虫類が衰退し、代わって哺乳類が新生代を通じて繁栄する。人類もその中の一種である。サルと人類の分岐点にあたる時期として地質学上の新第三紀鮮新世(約五三〇万年から約二〇〇万年前)の初期が考えられている(第1表参照)。分岐した初期の人類は猿人(アウストラロピテクス)と呼ばれており、従来発見されていた最も古い猿人は約四〇〇万年から三五〇万年前の東アフリカに分布したアファール猿人とされてきた。しかし、一九九四年(平成六年)になって同じ東アフリカのエチオピアで約四四〇万年前の頭や腕の骨が発見され、ラミダス猿人と名付けられた。この発見により、猿人が二足歩行を

第1表 地質年代と人類の進化

絶対年代	地質年代		人類他	時代区分	
万年前	中 世 代	三疊紀	爬 虫 類		
		ジュラ紀			
		白亜紀			
6500	新	古第三紀	哺乳類		
		新第三紀			
2370			猿人	旧石器時代	前期
530		鮮新世			
200	世	第 四 紀	原人	旧石器時代	中期
73					
13			旧人	旧石器時代	後期
1		後期			
0	代	完新世	新人	縄文時代	

始め、人類への進化を始めたのが約五〇〇万年前とする人類学の一説が有力となってきた。人類はその後、歩行から解放された二本の手によって道具を製作・使用し、急激な進化を遂げる。猿人はアフリカ各地に広がる一方、約一五〇万年前には原人（ホモ・エレクトス）が登場する。原人は居住地域をアジアやヨーロッパに広げるとともに、地域によって差異を示すようになる。ジャワ原人（ピテカントロプス）はほぼ完全な直立歩行をしていたとされ、約五〇万年前の北京原人（シナントロプス）は火を使用していたとされている。

約一五万年前になるとより複雑な石の道具を使用する旧人が現れる。イラクのシャニダール洞窟<sup>せうく</sup>で発見されたネアンデルタール人は、死者の埋葬に際して花を添えるなど、死者を丁重に葬る風習を持っていた。現在の人類の直系の祖先であるクロマニヨン人や柳江人などの新人が登場するのは、約三万年前のことであった。ヨーロッパの人々の祖先であるクロマニヨン人は洞窟絵画や骨角器に施した線刻画、ヴィーナス像の製作など、芸術的才能を発揮していた。

### 旧石器人の道具

旧石器人の主要な道具は石器であるが、石器の製作技術は人類の進化とともに、しだいに複雑・多様になっていった。

猿人の使用した石器は、礫<sup>れき</sup>の周辺を打ち欠いて刃を作りだした石核石器が多く、一部では礫からはぎ取った破片に簡単な加工を施した剥片石器<sup>はくへん</sup>も用いられていた。原人段階になると、ヨーロッパのアブヴィル文化・シュール文化では新たに握斧<sup>あくふ</sup>と呼ばれる石器が作られる。この石器は礫の表面の大部分を打ち欠いて、平坦に加工した石器である。これらの石核石器や握斧が主に作られた時代を前期旧石器時代と呼んでいる。

約八万年前から三万五〇〇〇年前の中期旧石器時代になると、定形化した剥片石器<sup>はくへん</sup>が作られるようになる。フランスのルヴァロア遺跡ではあらかじめ亀甲形に製作された石核から、ほぼ直角に剝離して石器の素材を作っている。

三万五〇〇〇年前から一万二〇〇〇年前の後期旧石器時代では、剥片をより规格的に多量に作りだす刃技法が誕生する。この技法で作られる石器は、縦長の柳葉形ないし短冊形をなす薄い剥片で、数個ないし十数個程度を木の棒などに取り付けて使用していた。